
『死』から始まった『生』の先に

ナナミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『死』から始まった『生』の先に

【Nコード】

N8064Q

【作者名】

ナナミ

【あらすじ】

死は、誰にでも訪れる。

例え「死」から目をそらしても、ならず「死」は、誰にでも平等に訪れる。

生きながら『死』んでいた男が「死」を迎えるまでの数刻の瞬間を、

男は『生』きていた。

男に訪れた「死」は、必然だった。

だけどその訪れる瞬間は偶然だった。

ならば「死」んだ男がこれから巻き込まれる事象は「必然」か「偶

然
「
か
…

1 話：死（前書き）

ただの思いつきです。

「こんな始まり方もあるのではないか？」と思いつきのみで書き上げました。

感想をいただければ幸いです。

1話：死

丑三つ時、一人の男は走っている。

森の木々を避けながら、唯ひたすらに。

男は、何を思いながら走っているのだろうか？

男の走る速度は、短距離走のタイムを計るときの、そのフィールドを走る速度と大差変わらない。

何故、男は障害物も多く、足場も悪い森の中をそんな速度で走ることができるのか？

男の表情は、アスリートが競技を行うときに行っている真面目な表情とは、まったくの無縁の表情をしていた。

恐怖・怖れ・畏怖・鬼胎・憂懼・狼狽・慄然…

そう言った感情が男から感じられる。

そう、男は『何か』から逃げているのだ。

自身を追ってる『何か』から…

自らの命の危険を感じるほどに恐怖する『何か』から…

男は、唯走り続ける、『何か』から逃げきることを考えて…

しかし、いくら命の危険を感じているからと言って、人であれば必ず、その限界は存在する。

男自身は気づくはずもないが、走ることによって男の足は上がらなくなっている。

そしてとうとう、剥き出しになっている木の根に足を取られ転倒する。

男は、自らが走っていたことによる慣性で転げまわる。

そしてやっと止まったのは、木にぶつかった時だった。

男は、氣にぶつかった痛みに耐え目を見開いた。

そこで男は、目にする。

自身を追っていた、自身に恐怖を与える『何か』を…

男が目にしたのは少女だった。

三白眼とまでは言えないがかなり鋭い眼をしている。

髪型は左側頭部に髪をまとめている、

そのためなのか左側半分の額が露出している。

服装は、男が通う学園の、女子中等部の制服を着用している。

これだけであれば、男が恐怖することはない。

だが男は恐怖をしている…それは少女が手に持っているものが起因している。

それは、刀。少女の身の丈ほどもある野太刀と呼ばれる刀だった。

男は少女にその野太刀の拔身を向けられているのだ。

そして、少女は男に向かって口を開く。

「うまく擬態したようですが、匂いまでは、気が回らなかったようですね。」

男の精神は、全て死に対する『恐怖』で染まっていた。

そこに少女が何を言おうと、一瞬だけ男の精神に波紋を投じるだけで、『恐怖』以外何も感じてはいない。

少女は、男が反応を返すのを待ってたようだが、痺れを切らしたのか男にさらに話しかける。

「未だに、演技を続けるのですか？ あなたのことは匂いで分かっています。」

召喚による契約ですか？ 律儀なものですな。ばれてしまえば関係ないと思いますが…」

男は、少女の話が分からない。

刀を突き付けられ、死に直面させられている中でさらに自身の理解を超える情報を与えられた時人間はどうなるのか。

そんなこと分かり切っている。

『恐怖』以外感じるすべはない。

男がこの少女と有効的な関係だったのあれば、このとき感じるものはまったく異なっていたであろう。

そんな、例えの話をしてもこの現状は変わらない。変わるはずもない。

「あなたが、その態度を貫くのであれば私は構いません。

ただ、無抵抗の相手を斬るのは私も初めての経験なので若干、戸惑いますが…

魔族相手に私は慈悲や情けをかける余裕を持ち合わせておりません。」

少女はそう言いながら男に向けていた刀の切っ先をそらした。

だが一向に男の『恐怖』は消えない。

一瞬の緩みもなく男は未だに死の『恐怖』を感じている。

必然…彼女は男に刀の切っ先を突き付けていた時より一層とその殺気を大きくしていた。

男は、その場から動けない。

物理的にではなく、精神的に追い込まれその場から動けない。

男は唯、見ているしかできない。

自らの領域に侵略してくるであろうその大きな刀を…

少女の右手に握られた野太刀が彼女の左脇に構えられる。

「還りなさい。」

少女のその言葉と共に野太刀はほぼ横なぎに振られ男を斬る。

それは明かに致命傷であり、切られた瞬間に即死でも可笑しくはない。

男の体は、右下腹部から左上腹部にかけ斬られ内臓が露出し、血が止めどなく溢れている。

斬り口は綺麗で血飛沫が飛び散るようなことはなかった。

少女は、人を殺すほどの傷を男に負わせた…

しかし、少女はそのことを一切気負っている様子はない。

寧ろ、何時もの通りといった様子だ。

「消えない？」

少女は、斬った後の男を見て不思議を感じているようだ。

それもそのはず、少女が口に使っていた『魔族』とは本来そういう存在だ。

人間の手で、魔界からこの世界…に召喚された存在。

契約により行動は縛られはするものの、一般の人間では太刀打ちの出来ない力を保有する。

その存在は、強者であるが故に人に害をなす存在としてしか呼び出されない。

故に迎撃され還される。

魔族を還す方法は、いくつか存在している。

一般的に用いられる方法は2つ。

召喚者を倒すことで契約を破棄させ、魔界に還す。

魔族自身に攻撃を加え、この世界に限界している力を削ぎ還す。

少女が今回取った方法は後者である。

故に少女は腑に落ちない。

男に…魔族に限界してられないほどのダメージを与えているはずだが、未だに男がこの世界に『存在』している。

「ん？ これは…生徒手帳？ こんなものまで…」

少女は、男が消えるのを見守るつもりなのかその場をすぐに移動せずに周囲を見渡していた。

その時、少女は見つけたのだ。

自らも所有している学園の生徒手帳を…

暗闇の中ではつきりと文字を読みことは出来ないが、辛うじて少女はそこに書かれている名前を見ることができた。

『鳳仙 悠久』

少女が拾った生徒手帳にはそう名前が書かれていた。

「ほう、血の匂いがすると思えば、お前か刹那…」

少女は、手帳の名前を見るためによほど集中していたのか、その場に現れた来訪者に気がつかなかった。

一瞬体を硬直させた後、刹那と呼ばれた少女は、声の方向へ体を向ける。

そこには、暗闇だというのにはつきりとその存在を主張する小さな女の子がいた。

地面に接触してしまうほどの伸長を超えた金色に輝く髪を持った女の子だ。

大きな刀を持つ少女に対し、恐怖を受けている様子はない。

寧ろ、それ以上に堂々としている。

「エヴァンジェリンさんですか…どうしたんです？

こんな夜更けに……」

少女は、いきなり現れた女の子に対し、『エヴァンジェリンさん』と名を呼んだ。

しかし何故、少女は明らかに自身より幼い女の子に対し、『さん』という敬称を付け呼ぶのだろうか……

それもそのはずである、女の子……エヴァンジェリンは、600年を生き続けた吸血姫なのだから……

幼い生りをしているが、エヴァンジェリンさんは、人間の寿命をはるかに超えた年月を生き続けているのだから……

「血の匂いがしたから、見に来たのだ。とすでに言っているはずだが？」

同様でもしているのか？ 初めて人を斬って……」

「何を言っているんです？ 私は人間など斬っていませんよ。」

エヴァンジェリンに『初めて人を斬って』と言われた、刹那は理解が追い付かない。

自身が斬ったのは男は魔族であり、人間ではないのだから……

「？ それでは、そこにあるそれは人ではなく魔族だと？」

「ええ……魔族特有の匂い……しましたし……」

そつだ、あの男は魔族である。と刹那は確信を持っている。

刹那が言う『匂い』とは、本当に感じるものではなく、経験による感覚だ。

嗅覚に似た形で、その感覚として体得している刹那はエヴァンジェリンの言葉が引っかかっている。

「確かに、魔族の匂いは感じるが…
私はそれ以上に、純粋な人間の血の匂いを感じている。

それこそ、私の喉を久々に乾かすほどの匂いがな…
それは、人間だよ。刹那…」

「え…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8064q/>

『死』から始まった『生』の先に

2011年10月8日13時45分発行